

ひきこもりを抱える家族におけるきょうだいの自律過程

和田美香

(厚木市立病院小児科)

ひきこもりを抱える家族におけるきょうだいの自律過程について報告させていただきます。ひきこもりは「さまざまな要因の結果として社会参加を回避し、原則的には6カ月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態を指す現象概念」(厚生労働省, 2010)とされます。ひきこもりの数の把握は困難なもの、内閣府は、趣味の用事の時だけ外出するといった人を含む「広義のひきこもり」を、約70万人と推定しています。ひきこもりを抱える家族において、本人に昼夜逆転、家族に対する支配的な言動や暴力などの行動上の問題が生じた場合、家族は非常に気を遣う緊張の高い生活をし、精神的健康度が低下することや、コミュニケーションの障害を抱えて、親はきょうだいへの影響を気にしていることが報告されています。このような状況を背景に、支援では家族システムの機能不全も重要な対象と位置づけられています。

ひきこもりについて、斎藤(1998)は、複数の原因を対人関係との関係から個人、家族、社会の3つの領域に分け、すべてにおいて何らかの悪循環が生じ、1つの独立したシステムのように、こじればこじれるほど安定するとし、「ひきこもりシステム」と名づけました。健康なシステムでは、3つのシステムは相互に接して連動し自らの境界も保たれていますが、ひきこもりシステムでは、相互に交わらず連動もせずシステム相互に力は働きますが、内部でストレスに変換され悪循環を助長するとされます。

家族への支援が重要とされるなかで、現状は主に親を対象とし、きょうだいは見過ごされがちです。しかし、ある子どもがひきこもり状態になると、次々に他のきょうだいと同じようなことになる場合もあるとの指摘があります。NHKの「ひきこもりサポートキャンペーン」や「東京都ひきこもりサポートネット」などには、きょうだいからの相談も多いことが報告されており、一緒

に生活するきょうだいにとっても不安や困難を感じる切実な問題であり、ひきこもりの長期化や高齢化にともない心理的な負担が大きいと推測されます。

筆者が行った、きょうだい14名を対象にしたインタビュー調査では、きょうだいは、同胞、父親、母親それぞれに相反する感情を抱き、やり取りに疲弊し巻き込まれ状態になりますが、家族から距離を置くことで自律していくことがわかりました。ただし「じりつ」には、「自分で自分の行為を規制する」という意味の「自律」と、「自分の力で身を立てる、ひとりだち」という意味の「自立」があります。きょうだいの場合、家族状況に巻き込まれず自己コントロールする意味で、「自律」を用いました。

心理学では、2つを明確に区別せず曖昧なまま用いられているとの指摘があります。また青年期の研究では、「自立」を用いて「親からの自立」を扱う研究が多いようです。ひきこもりが「親からの分離」といった思春期の課題における挫折とされるなかで、きょうだいは同様の発達段階にあり、同様の課題に取り組みながら、どのような体験をし、どう自律していくのかという問いが生じます。そこで研究の目的を、思春期・青年期に、きょうだい家族から自律するまでの体験経路を明らかにし、自律の意味についてシステム論に基づいて検討することとしました。

方法として、先行研究で協力いただいた14名のうちの3名のデータを用いました。このデータを用いた理由は、「何歳のときどうだった」などの時間的な内容が比較的明確に語られているため、分析方法に適していると考えたからです。調査期間は、2008年7～12月に半構造化面接を2回、2011年9月に3回目を1名に行いました。分析では、きょうだいの体験に関連する語りに着目し、見出しをつけて時系列に並べ、TEM図によって可視化しました。協力者の年齢は24～32歳で、きょうだい構成は、姉が1名、妹が2名でした。支援団体に協力を依頼し、支援者から紹介してもらう方法を用いました。

ここで、TEM概念の本研究における位置づけをご説明します(表1)。分析にあたり、等至点(EFP)を〈家族から自律する〉、両極化された等至点(P-EFP)を〈家族から自律しない〉と設定しました。分析を進めるなかで、分岐点(BFP)を〈家族への相反する感情〉〈言っても変わらない〉とし、必須通過点(OPP)を〈会話がなことに戸惑う〉〈同胞を気遣う〉〈家族への相反する感情〉〈家族とのやり取り〉〈言っても変わらない〉〈距離を置く〉〈家族や自分を客観的に見る〉としました。また、社会的方向づけ(SD)として〔家

に押しとどめる親の意向]を、社会的促進 (SG) として [進学時の自主性の尊重] [親戚からの無条件の支え] を捉えました。

表 1 TEM 概念の本研究における位置づけ

概念	意味	本研究における位置づけ
等至点: EFP (Equifinality Point)	多様な径路がいったん収束する地点	〈家族から自律する〉
両極化された等至点: P-EFP (Polarized-EFP)	等至点と対になるような地点	〈家族から自律しない〉
分岐点: BFP (Bifurcation Point)	ある選択によって、各々の行動が多様に分かれていく地点	〈家族への相反する感情〉 〈言っても変わらない〉
必須通過点: OPP (Obligatory Passage Point)	理論的・制度的・慣習的に、ほとんどの人が経験せざるをえない地点	〈会話がないことに戸惑う〉〈同胞を気遣う〉 〈家族への相反する感情〉〈家族とのやり取り〉 〈言っても変わらない〉〈距離を置く〉 〈家族や自分を客観的に見る〉
社会的方向付け: SD (Social Direction)	特定の選択肢を選ぶように仕向ける、環境要因や社会文化的圧力	〔家に押しとどめる親の意向〕
社会的促進: SG (Social Guidance)	SDに対抗し個人の行動を等至点へ誘導する、環境要因や文化社会的圧力	〔進学時の自主性の尊重〕 〔親戚からの無条件の支え〕

そして、きょうだいの体験径路についての TEM 図を作成しました。その径路は4つの時期に分かれると考えられ、次にそれぞれの時期について説明します。まず、第1期は同胞の変化に直面する時期で、きょうだいは同胞が突然話さない、目を合わせないといった異変に戸惑い、自分なりに原因を考えて気遣います。第2期は状況に巻き込まれる時期で、家族それぞれに相反する感情を抱き家族を変えたいと思いつつやり取りに疲弊します。同胞には分かる気がする、力になりたいと思う一方、動きださないことに苛立ちや嫌悪感を抱き、母親には子育てへの悩みをいたわる一方、助長する対応に苛立ち、父親には立場を思いやる一方、価値観を変えられないことに苛立ちます。この体験は、その後も状況によって容易に揺り戻されると考えられます。第3期はタイミングを見つづ距離を置く時期で、きょうだいは悪循環による閉塞感を抱き、家族とは距離を置いていきます。そして、第4期の関わりながら自己コントロールする時期では、自分の生活をコントロールしながら家族と向き合っていくようになります。

次に、分岐点 (BFP) 〈言っても変わらない〉について検討します。ここではきょうだいが家族から自律することを遠ざける力として、〔家に押しとどめ

る親の意向) と、家族から自律する方向へ向ける力として〔進学時の自主性の尊重〕〔親戚からの無条件の支え〕といった力のせめぎあいが見られます。例えば(表2)、「親の意向」では、「縛りつける家なんですね。父親は居てほしい、母親は出さないという感じで」という語り、「自主性の尊重」では、「留学とかだったら大丈夫。父は勉強に対してはいいって言う人」という語り、「親戚からの支え」では、「親戚の家に行って吹っ切れた。そうだと職しなきゃと思って」という語りが見られ、体験の方向性に影響を与えていることがわかります。

表2 きょうだいの語りの例

SD: 家に押しとどめようとする親の意向 「すごく縛りつける家なんですね。父親は居てほしいって感じで、母親は出さないって感じで。」(Cさん)
SG: 進学時の自主性の尊重 「留学とかだったら大丈夫。父は勉強とかに対してはいいって言ってくれる人なので。」(Aさん)
SG: 親戚からの無条件の支え 「親戚の家に行ったんですよ。それで吹っ切れた。そうだと職しなきゃいけないと思って。」(Bさん)

これらの検討を通して、きょうだいの体験は複数の過程が重なり合うものであり、家族へ複雑な感情を抱きやり取りに疲弊する体験は、その後も状況によって容易に揺り戻され、自己コントロールは不安定なものだと考えられます。また、径路における〈言っても変わらない〉という体験は、歪んだ家族システムがそのまま安定しており、変えようとしても変わるものではないという認識への変化であり、何度も失敗を繰り返した後、深い感情を伴って体験される転換点となるものと考えられます。

以上のような、きょうだいの自律過程をシステム論から捉えると、家族システムにおけるきょうだいの個人システムの変容といえると考えます。第2期における家族システムは、「形態維持 モルフォスタシス」(Maruyama, 1963/1987)の過程といえ、歪んだ家族システムがそのまま安定している状態で、きょうだいに変えようとしても変わるものでもなく、負のフィードバックが作用すると考えられます。続く第3期のきょうだいの個人システムは、「形態生成 モルフォジェネシス」の過程といえ、親の意向を汲みつつ家族とは心理的・物理的に距離を置いていく意味で、正のフィードバックが作用すると考えられます。このようなきょうだいの自律(すなわち家族システムから見る逸脱)は、偶然の発端に依存するかもしれませんが、親子それぞれの発達段階の課題(子ども

は親からの自立，親は子離れ）が，展開の作動因になると考えられます。これは，相互ポジティブ・フィードバック・ネットワークと捉えられます。

また，第4期のきょうだいから見た家族システムは，強く安定した自己言及システムといえ，「終わりが見えない」という思いを持ち続けると考えられます。きょうだいの自律が一時，家族システムに何らかの関係性の変化を促したとしても，同胞のひきこもりを解消するような作動にはならず，家族システムが自己自身へと回帰するように作動すると考えられます。家族を取り巻く環境との相互作用については，今後の検討課題にしたいと思います。これで発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

【引用文献】

厚生労働省. (2010). ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン.

斎藤環. (1998). 社会的ひきこもり 終わらない思春期. PHP 研究所.

Maruyama, M. (1963). The Second Cybernetics. *American Scientist*, 5:2, 164-179. (マ
ゴロウ マルヤマ・佐藤敬三 (訳) (1987). セカンド・サイバネティクス. 北川敏男・
伊藤重行 (編). システム思考の源流と発展. 九州大学出版会)